

D 36 岩手県の染型紙—煙子屋について—
県立盛岡短大 平山 貞

目的 江戸時代伊勢白子の型売商人は、岩手の町や村でも行商をし、紺屋と取り引きをしていたことが、記録によって知られる。最近東北の浪岡家の物置小屋から、かなりの枚数染型紙が発見された。現在町の教育委員会が中心になり、調査整理にあつている。

今回は岩手県に残っている染型紙の中から、南部古代型染元、小野染彩所の屋長煙子屋の型紙を調査し報告する。岩手県には伊勢白子の他、会津喜多方小野寺家からも行商に入つている記録があるが、それらの関連を明らかにしたい。

方法 煙子屋の歴史は古く、藩政時代南部藩の御用染師として代々仕え、寛永の昔から360年を数える。現在小野信太郎氏は4代目を継ぐ。先代小野三郎氏存命中も度々お伺いしているが、現在使用している染型を調査させて頂き、文獻も参考とした。

結果 戦前迄は代々伝来の型紙が数千枚に及んだが、戦時中に散逸してしまい、現在江戸時代の原型は少なくなつた。原型保存のため復元中である。藩御用の染物は武士の注文で、幔幕、襦袢、旗差物、鎧下、袴などであるが、藩独自の文様があり、向い鶴や千鳥の文様等は止め型であり、藩の約束文様であった。テグインとがどこではされ、型彫りが藩内で下されたものか、明らかではないが、今回発表の小野寺家、新田家の染型との関連等について、今後研究を共同で続け、東北の染型紙について究明していきたいと考える。